2115　離島覚書（香川県・佐柳島）

令和３年 10 月 21 日

高齢化率９割超

松山駅から予讃線で多度津駅に出て、駅前のホテルで朝食のモーニングを食べ、タクシーで多度津港へ。たどつ汽船の「フェリー新なぎさ２」で佐柳島（さなぎじま）の本浦に向かう。９時 05 分に出発して、途中高見島を経由、９時 55 分に本浦に着いた。高見島で大半の客（12 人）が下船した。本浦では私を含めて３人が下船、１人は釣り竿を持った高齢の男性、もう１人は島の人と思われる高齢の女性だった。

佐柳島には 1999 年 10 月に香川県の調査で来ているので、22 年ぶり２回目の訪問になる。昨年、隣の高見島に来た時に合わせて訪問する計画を立てていたが、佐柳島の自治会は新型コロナの感染を恐れて島外からの観光客の立ち入りを禁じていたので実現しなかった。ようやく新型コロナの感染者が減ったため、訪れることにしたのだった。

佐柳島は多度津町の北西約 15 ㎞に位置する南北に細い島である。島の面積は 1.83 ㎞^{2}、周囲は 7.2 ㎞で、中央付近に標高 248.5ｍの高登山（たかのぼりやま）がそびえる。島の東海岸の北と南に分かれてそれぞれ長崎、本浦という２つの集落が形成されている。観光パンフレットによると、長崎は福山や笠岡諸島の真鍋島から移住、本浦は高見島から７人の人名（にんみょう）が移り住んだといわれている。

佐柳島へは本土側の多度津港と真鍋島を結んでフェリーが就航しており、多度津港との間は１日３往復、真鍋島とは土曜日のみ三洋汽船㈱が１日１便運航している。

2015 年国勢調査時の佐柳島の人口は 72 人、世帯数は 51 戸であった。このうち 65 歳以上が 67 人で高齢化率はじつに 93.1％に達していた。この時点で 60 歳未満の人は２人（おそらく後述するネコシマホステルの夫婦）しかいなかったので、現在はさらに高まっているかもしれない。ちなみに 1998（平成 10）年当時の人口は 252 人、世帯数は 160 戸であったか

ら、この 23 年間に人口、世帯数ともに激減したことになる。

今でこそ超高齢者の島になってしまったが、佐柳島は 1956（昭和 31）年に多度津町に編入されるまで、仲多度郡佐柳島村として１島１村であり、当時は独立して村として成り立つほどの人口を抱えていたのである。

島には現在、商店も自動販売機もない。ほとんどが 80 歳近い高齢者なので島の外に買い物に出かけることもできない。まさに買い物難民といえる。このため、「サンサンマーケット移動販売」というのが月に２回、月曜日に開催されている。ショッピングストア今川が主催しているようだ。島の高齢者にとってこの移動販売車がまさに命綱になっている。２週間に１回の頻度なので、必要なものを買い揃ておくのだろう。

本浦地区の高齢者（左）、長崎の高齢者（右）

本浦地区

本浦の集落は山裾にへばりつくように南北に細長く形成されている。フェリーが発着する港の南側に人家が密集する。集落の海側は近年埋め立て造成された土地が広がるが、もともと平地はほとんどなかった。

漁港には４隻の船が係留されていたが、うち１隻は廃船で、残り３隻のうち２隻は船外機であった。後で聞いたところでは、最後の漁師が 16 年前に亡くなり、現在、本浦地区には漁師はいないという。したがって３隻の船はたまに釣りに出かけるために使われているのだろう。

集落に入ってすぐの家で、庭木を刈り込んでいる高齢の男性がいた。建物には「花咲荘」と達筆な墨書きの看板が掛かっていた。彼はもともと九州の出身で、50 年以上大阪で生活していたが 20 年前に奥さんの実家がある佐柳島に移住してきたそうだ。自然に包まれた島での庭木いじりの生活に満足しているという。

さらにその先に進むと、２人の女性が海岸近くで刈った枯草を処分する作業をしていた。１人は夫婦で生活しているが、もう１人は単身者。口が達者な人が後者だ。彼女は若い時に神戸で働いており、50 年前に島に嫁いだそうだ。本浦地区には 40 軒ほどの家が建っているが、そのほとんどは空き家だという。朽ち果てている家が少ないのは、盆暮れに島に戻って来る人が多いためだ。この女性によると佐柳島にはイノシシが多く、これまでに 100 頭以上も捕まえて殺しているが、ちっとも減らないらしい。昼間でも出没するようで、５回も遭遇したことがあるそうだ。つい最近も海を渡って泳いできたイノシシが海岸にようやく辿り

着き、疲れ果てて１日間、海岸の岩の上で横になっているのを見たという。

本浦地区で出会った３人の話を総合すると、本浦の夫婦世帯は５戸、残りは高齢の単身者で、人口は 22 人だという。したがって世帯数は 17 戸になる。

本浦には多度津町の佐柳出張所と診療所が置かれており、一緒の建物に入っている。隣に簡易郵便局があったが、入り口にネコのための餌置き場が置かれていることから最近廃止されたようだ。郵便局の前に廃屋があった。郵便局か役場の職員の宿舎だったのだろうか。診療所には週に１回医師が来て、本浦と長崎の両地区で診察している。また出張所には島出身の職員が常駐している。住民基本台帳上の人口と世帯数を確認すべく出張所を訪ねたが、留守番役の女性がいただけで用を得なかった。職員の方はこの日、10 時までいたようだが、多度津に出かけたという。

山裾にへばりつく本浦地区の集落（左）、診療所と役場の出先が入る建物（右）

咸臨丸の水夫

集落のはずれに両墓制の埋め墓と参り墓があった。船で一緒だった釣り人風の男性が墓の前で読経をあげていた。普通の人はお経など読めないので、信仰の篤い島の出身者なのかもしれない。

両墓制については長崎地区にもあるので、後で触れることにしよう。

墓の背後の一段高い位置に真言宗の乗蓮寺がある。本浦と長崎の両地区共通の寺になる。島の人口は 70 人前後であるにもかかわらずこの寺に住職がいるようだ。

寺の境内に「佐柳島の誇り」と書かれた立て札が建っていた。咸臨丸（かんりんまる）に乗ってアメリカに渡った時の水夫のうち２人が佐柳島の出身だった。平田冨蔵と佐柳高次という。この２人の墓が階段を登ったすぐ左手に置かれていた。境内には大きな銀杏の木が２本あり、古いお寺だ。

1860（万延元）年、日米修交通商条約の批准書を交換するため幕府遣米使節団が派遣された。その際、正使一行が乗艦した米国軍艦の随伴艦として派遣されたのが幕府の軍艦咸臨丸であった。勝海舟を艦長に、合計 105 人が太平洋を渡った。乗組員は士官 17 名、医師４名、奉行従者５名、大工役１名、鍛冶役１名、塩飽出身水主 35 名、長崎出身水主 31 名、米海軍士官・水兵 11 名という内訳であった。塩飽諸島の島別の水主数は広島 11 名、本島 10 名、高見島４名、櫃石島３名、瀬居島３名、佐柳島２名であった。塩飽諸島の水主は人名の出身者がほとんどだったから姓があったが、長崎出身者のほとんどの人に姓はなかった。なお使

節団の中には福沢諭吉やジョン万次郎もいた。

佐柳島から咸臨丸に乗り組んだ２名のうち、平田冨蔵は咸臨丸がサンフランシスコ到着後、彼の地で病死した。この時、冨蔵とともに広島出身の岡田源之助と長崎出身の峯吉も併せて亡くなり、ローレル・ヒル墓地に埋葬された。３名の墓はその後顧みられることがなかったが、1887（明治 20）年に富藏、峯吉の墓が、1898（明治 31）年に源之助の墓が発見され、再整備された。その後、1901(明治 34)年にサンフランシスコ郊外のコルマに日本人共同墓地が設けられ、３名の墓もコルマ日本人共同墓地に移され、現在に至る。

佐柳高次（1835～1891）は本名を前田常三郎といった。1855（安政２）年に長崎海軍伝習所の水夫に採用され、1860（万延元）年に勝海舟らとともに米国に渡り、その後坂本龍馬の海援隊に参加。1869（明治２）年に陽春丸にのって箱館戦争に参戦し、戦後、佐柳島に帰島する。結婚後、島で渡船業や酒屋を営んだといわれている。また村会議員も務めた。

２人とも佐柳島本浦の出身だった。佐柳高次は佐柳島に戻り亡くなっているので、生まれ育った佐柳島に墓地があるのは当然だが、平田冨蔵の墓は生まれ故郷の佐柳島とサンフランシスコの２ヶ所にあるわけだ。

冨蔵の墓は墓石の側面に冨造と書かれていたのですぐにわかった。一方佐柳高次の墓は前田高次と書かれており、おそらくこの墓に違いないと思い、後で調べると確かに本名を前田といったことがわかり、間違いなかった。この２人の墓は１つの墓石を挟んではす向かいの位置にあり、直線距離で２ｍほどしか離れていない。

乗蓮寺にある平田冨蔵の墓・和去唐卒と書かれた墓石（左）、唯悟道戒信士の戒名が彫られた佐柳高次の墓（右）

大天狗神社と八幡神社

船着場の待合所の扉に、「大天狗神社はイノシシが出没しているため立入禁止になっています」と書いた紙が貼られていた。瀬戸内海のほぼ全ての島々にイノシシが生息しているが、立入禁止とあえて貼り紙をしている島は佐柳島が初めてであった。イノシシにはこれまでに何回も白昼遭遇しているし、イノシシの方から襲ってくるとも思えないので、警告を無視して大天狗神社に行くことにした。

海岸の近くに、「八幡閣大明神」と書かれた石の鳥居が立つ。文化十年（1813 年）に建てられたことが記されていたので、今から 200 年以上前からこの位置にあったと思われる。周囲の地形から察するに、以前は汀線付近に立っていたのだろう。

集落背後の坂道を登るとすぐに石段が現れた。石段の幅は１間ほどもあり、幅広で歩きや

すい。加えて周囲の草はきれいに刈り取られており、明るくイノシシが出てくるような環境ではない。「シマダス」によると、石段は 367 段あるそうだが、途中で休みながら登る。

神社に近づくと、階段の両脇に神社を整備した時に寄進した人の氏名と寄進額を刻んだ石柱（玉垣）が立つ。その数は 200 基以上に及ぶ。社殿は 1805（文化２）年に造営され、1879（明治 12）年に改築されたそうなので、明治期の改築時の寄進だろう。それにしてもその数が多いことから、この島が繁栄していた当時のことが偲ばれる。

最後の詰めの急階段の先に銅葺きの鳥居があり、緑青を吹いて青銅色になっている。鳥居の先に隋身門があり、そこには客船の絵が掲げられていた。1964（昭和 39）年に奉納されたものですっかり色あせている。島の出身者は船乗りが多かったから、自分の乗った船の絵だったのかもしれない。さらに急な石段を登った先に拝殿があった。お賽銭をあげて参拝する。正面には天狗の面が掲げられていた。さらに山際に本殿がある。

ここから山道を登ると奥ノ院があるそうだが、おそらく道は狭くなり草が生い茂っていることは確実なので、行くのを断念した。

再び階段を下り、集落を抜けてもう一つの神社である八幡神社に向かう。神社は集落の北外れの海岸沿いにあった。隣に上述した多度津市役所の佐柳出張所と診療所が入る建物がある。

八幡神社は 1684（貞享元）年の建立された島の産土神（うぶすながみ）であった。1935（昭和 10）年に再建されている。海岸沿いの道路に面して神社の鳥居があり、境内を玉垣の石柱が取り囲む。やはりこの鳥居も昔は波打ち際に立っていたものだろう。

参道を進むと、途中に漁業関係者が八幡神社を整備するにあたって寄進した時の石碑が置かれていた。1971（昭和 46）年当時、佐柳漁協は総額 125 万円を寄進している。名簿には組合長、理事５名、監事２名、参事１名他に組合員 84 人の氏名が彫ってあり、当時、島には 90 人ほどの漁師がいたことを物語っている。

大天狗神社の拝殿（左）、八幡神社の鳥居と拝殿（右）

ネコの島

八幡神社の境内の石に腰かけて、多度津駅で購入してきたサンドイッチを食べ、紅茶の缶飲料を飲む。佐柳島には飲食店も、商店もさらに自動販売機もないと聞いていたので、駅で調達したのだった。

ところがそこにネコが集まり始めた。22 年前に佐柳島を訪れた時にもネコが多い島だと

の印象をもっていたが、その後野良ネコが増え、これを見物に来る観光客も増えて、ネコに餌を与えるものだから、ネコは人を見ると餌をもらえるものと思い込んでいるようだ。結果、餌は潤沢になり、ネコは益々増えてしまった。

佐柳島に上陸したときから、ネコが馴れ馴れしくついてくる。餌をくれると思っているのだろう。ちょっとばかり脅しても逃げないし、石を投げつけてようやく退散する。

野良化した家ネコを島の観光資源に利用している島は、過疎化の進展に連れて年々増え続けている。愛媛県の青島、宮崎県の深島、福岡県の藍島など人口よりもネコの方が多い島も珍しくなくなった。ネコが好きな人もいれば嫌いな人もいる。ネコは多産で、放置しておけば瞬く間に増えるから、ネコの糞尿で迷惑する人も出てくる。ネコ見客で島が活性化したなどと歓迎する声の陰でこうした状況を苦々しく思っている人も少なくない。

佐柳島はネコの島になっているのは間違いなく、船の待合所には、ネコ見客に対し注意を喚起するポスターが貼られていた。英語と中国語が併記されていたので、外国人のネコ見客も多かったのだろう。ポスターには①持ってきた食べ物などのゴミは持ち帰ること、②家の敷地内に入っての写真撮影の禁止、③エサは少しずつ、道の端っこであげること、の３点が書かれていた。

ただ新型コロナが流行り始めてから１年半、島に来る観光客はめっきり減っているのでネコは餌が不足しているのを実感しているに違いない。だから餌をくれるものと思ってついてくる。

防波堤のネコ（左）、待合所に掲示されたネコ見客への注意書（右）

ネコシマホステル

昼食後、島のもう一つの集落である長崎地区に向かう。本浦と長崎の間は３㎞ほど離れており、海岸線の一本道でつながる。ちなみに島を一周する道路はなく、島の西側は自然海岸が続く。

両地区のほぼ中間に佐柳小中学校が置かれていた。児童・生徒が同じ条件で通学できるようにとの配慮からだろう。

この小中学校は 1992（平成４）年に休校になり、1995（平成７）年度いっぱいで閉校になった。島に子供がいなくなって 30 年が経つのだ。その後、旧校舎は「佐柳島体験センター」として活用されていた。塩飽諸島の島々のうち、小中学校が残るのは本島と小手島だけとなっており、閉校になった小中学校はどこも佐柳島と同様、跡地を体験センターとして活用し

ている。このため利用が重なって利用者が減ったため、2016（平成 18）年 12 月にこのセンターも閉鎖された。

その後を引き継いだのが「ネコノシマホステル」である。1954（昭和 29）年に建てられた木造校舎を活用した宿泊施設で、喫茶とカレーなどの軽食を提供、また宿泊客向けに「島の夜ごはん定食」も準備していた。

このホステルは４年前に大阪から移住した村上淳一さん（48 歳）と奥さんの直子さんが経営していた。ご主人の父親が佐柳島出身だったことが、島との縁を結んだ。しかしネコジマホステルは 2020 年６月から無期限の営業休止になっている。コロナの影響もあったが、どうも島民との意識のずれが大きな原因のようだ。後述する元自治会長の池田さんの言では、ご夫婦は自治会に加入せず、消防団も最近まで入っていなかったようだ。またネコに関する考え方にも大きなズレがあるという。

このネコシマホステルは佐柳島を観光の島にしようと考える行政の支援を受けて取り組まれたものである。夫婦は総務省の「地域おこし協力隊」として採用され、その賃金は夫婦で月 30 万円を超えるから、ホステルが営業できなくても、生活は安定しているという。

建物に人の気配が感じされたが、校舎の裏側にはロープが張られていたので、中に入るのは遠慮した。

旧木造校舎を活用した宿泊施設（左）、ネコシマホステルの全景（右）

長崎地区

ネコジマホステルから長崎地区まで一本道である。海側は防波堤が整備され、反対側にはすぐに山が迫る。おそらく道路が整備されるまでは、海岸沿いに細い道があったにすぎなかったに違いない。途中に海底送水管で送られてくる上水道の増圧所が置かれていた。

沖には手島、小手島、広島などの塩飽諸島の島々が横たわる。

道路の山側には、廃棄された鉄製の扉などが並べられその上に重石が載せてある。何のためなのかよくわからない。ひょっとすると雑草が生えないようにしているのかもしれないなどと想像しながら歩く。

13 時 04 分に長崎の集落に着いた。長崎地区の人口は本浦地区よりもわずかに多く、24～25 人らしい。上述したネコジマホステルの夫婦を除くと全員が高齢者で、しかも本浦と同様、単身者がほとんどだという。

集落手前にフェリーの発着する船着場があり、漁港の先の北側に長崎地区の集落が形成

されている。漁港に１隻の漁船が入ってきて、奥さんと思われる人が何かを受け取った。

漁港には漁船５隻と船外機２隻が係留されていた。そのうちの１隻に漁師がいたので、島の漁業のことを聞くべ声をかけると、「誰の許可を受けて島に来た。ここは 80 歳以上の老人ばかりで、島の待合室に入島禁止と書いてあるのを読まなかったのか」とものすごい剣幕である。

島は私有地ではないし島民に入島を拒否する権限はないはずだ。一方新規感染者数は収束しつつある時期なのに、異様な反応だ。それだけコロナ脅威を伝えるマスコミの報道が浸透していると実感する。反論すれば、大男が殴りかかってきそうな雰囲気なのだ。島でのトラブルは避けたいから、忠告に従って道を引き返した。

山側の斜面から集落を確認すべく、階段を登った。斜面にも家が建っていたが、多くは空き家で崩れかけた家もある。さらにすでに建物が撤去されて更地になっているところもあった。集落の上には神社の鳥居が立っていたが、その先に社殿はなく、神社はどこかに移されたのだろう。

ところで長崎地区の両墓制の墓地は集落の北側にある。ここまできて墓を見ないわけにはいかないので、再び港に引き返して墓に向かう。するとまた件の漁師がバイクで走ってきて、「集落に入るな」と阻止した。「集落には入らないから墓まで行かせてくれ」と頼んで、集落を迂回し、防波堤に沿って北に向かう。近年、大きな防波堤が整備されたようで、集落を避けて海岸沿いを両墓制の墓地まで行くことができる。新しい防波堤からは旧防波堤の境が確認できた。

山と海岸線の狭隘な土地に帯状に形成された長崎地区の集落

両墓制

本浦と長崎の両集落ともに集落のはずれに墓地が置かれている。参り墓と埋め墓の２つがあり、いわゆる両墓制である。塩飽諸島の島々には何れも両墓制が残っており、全国的にも珍しい風習である。

長崎地区では、集落に近い方が参り墓、一線を画してその先に埋め墓がある。本浦地区の場合も同様の配置で、集落に近い方が参り墓、その先が埋め墓になる。長崎地区の両墓はかなり整然と配置され、典型的な両墓制をみることができるため、1965（昭和 40）年に香川県の指定有形民俗文化財に指定されている。埋め墓は死体を埋めた後に海岸から運んできたと思われる玉石を並べられ、生前の氏名を書いた小さな石柱が建てられている。そして石

柱は一様に極楽浄土があるとされる西を向いている。氏名を書いた石柱とは別に大砲の砲弾のような形をした石も立てられている。

埋め墓は土葬時代の名残で、今日のように火葬され、土葬が禁止されるようになると、埋め墓は必要でなくなる。島外で火葬され、骨だけが島に戻って来るのだが、今では骨壺が埋め墓に納められているようだ。

もともと墓は海岸に直接面していたが、現在は墓の前面に巨大な防波堤がつくられている。したがって墓から海を見ることはできない。防波堤の上を歩きながら墓を眺めたが、その長さは 150mほどに及ぶ。防波堤は墓が切れた 50mほど先で行き止まりになった。

海側にヘリポートのようなものがつくられ、山に向かって広い舗装道路が整備されていた。両側に桜が植えられた坂道を登っていくと、砂防堰堤が現れた。ヘリポートのようなものは堰堤をつくるために導入した重機や物資を運ぶための桟橋であり、道路は建設用につくられたものだった。桜の樹齢から判断すると、15～20 年前に工事が行われたのだろう。

埋め墓（左）、参り墓（右）

元自治会長

両墓制の墓を見てから漁港に戻ると件の漁師にまた会った。今度は先方から話しかけてきた。池田信夫（65 歳）さんといい佐柳島で唯一、漁業で飯をくっている漁師だという。長崎地区の自治会長も務めたことがあるそうだ。

両親が佐柳島の出身で、本人は神戸で生まれ育ち、11 年前に佐柳島にＩターンして、７年前から漁師をしているという。奥さんを神戸に残したままで単身赴任というから、よほど島と漁師が好きなのだろう。

彼は「佐柳島猫を見守る会」という会を立ち上げ、島のネコの避妊手術や傷ついたネコの治療を進めてきた。費用は漁協や地元の漁業関係者からの寄付と一般からの募金で調達している。ネコが際限なく増えることには反対のようで、傷ついたネコの治療と共に避妊手術も進めている。通常、避妊手術後はすぐに放つが、これだと費用は１～1.5 万円で済むらしい。しかし、術後１週間ほど入院させないと命を落とす危険性があるという。ただこの場合の費用は 3～3.5 万円になるそうだ。

多度津市長はネコ見の観光客を誘致し島おこしにつなげたいと考えているが、話を聞いていると彼はこの路線に反対で、「静かな島であって欲しい」と思っているようだ。また市長の路線で観光振興を図ろうとしている上述したネコジマホステルにも反対の立場をとっ

ている。同ホステルが無期限休業を掲げているのも、新型コロナの影響に加えて島内での路線対立が基本的に存在しているためなのだ。

両墓制を見に来る観光客とネコ見客とはまったく客層が異なるという。彼はネコに餌を与えに来る浅はかな観光客をどうも嫌っているようなのだ。私はネコ見客には見えなかったようで、おそらく帰り際に呼び止めて話をしてくれたのだと思う。彼から少し佐柳島の漁業の話を聞いたのでまとめておこう。

佐柳島の漁師は八幡神社の石碑のところでも述べた通り、島単独で佐柳漁協を組織していた。しかし人口の減少と共に組合員が減り、2004 年に高見漁協と合併し、現在は多度津町高見漁協となっている。同漁協の佐柳島の組合員は、現在、正：４人、准：２人の６人にすぎない。６人全員が長崎地区の住民で、上述したように本浦地区には漁師はいない。そして市場に出荷する本職の漁師は池田さんだけで、残りの３人の正組合員は「おかず獲り」の漁師だという。池田さんはタコツボを営むが、その他に一本釣りや刺網を組み合わせているようだ。彼以外の漁船も同様に小さいので、同じような漁業が営まれているのだろう。

ちなみに 2015 年国勢調査時の時点で、島で働いている人は 14 人いたが、そのうち漁業に９人が従事していた。それから６年が経つが、高齢化が進み、就労者は益々減っているのが現実なのである。

元自治会長とタコツボ（左）、長崎地区の漁港と漁船（右）

船の時間も迫ってきたので話を途中で切り上げ、待合室に戻る。長崎では車の乗下船はできない。もっぱら人だけの対応のため、浮桟橋が整備され、フェリーの横から乗船するようになっている。長崎に用のある車は本浦で下船して、島内を走るのだろう。

15 時 05 分に長崎を出発、長崎地区からの乗船者は私１人であった。本浦から２人乗船、朝一緒だった釣り人も乗った。高見島から 10 人ほどが乗船した。帰りのフェリーに車は１台も搭載されなかった。16 時すぎに多度津港に着いた。